

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節

本願道

——ルカ伝1・26～38、イザヤ42、43、49、50、53——

1975年12月21日

小池辰雄

汝の言のごとく我に成れかし 工ホバの僕の歌 旧約の本願道 イザヤ書53章 キリストの本願道が一貫 『板極道』 「方法は無より生じ、煩惱は我より生ず」 読者からの手紙 どうぞこの私を通して 祈り

【ルカ1・26～38】

26その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女のもとに、神より遣さる。27この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。28御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』29マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、30御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。31視よ、なんじ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。32彼は大人らん、至高者の子と称えられん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、33ヤコブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』34マリヤ御使に言う『われ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』35御使こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。36視よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。37それ神の言には能わぬ所なし』38マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』ついに御使、はなれ去りぬ。

【イザヤ42・1～8】

1わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。2かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず。3また傷める蘆をおることなく、ほのくらき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん。4かれは衰えずして喪胆せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。5天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの産物とをひらき、その



うえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い給う。6云く、われエホバ公義をもてなんじを召したり。われなんじの手をとり汝をまもり、なんじを民の契約とし異邦人のひかりとなし、7而して瞽の目を開き俘囚を獄よりいだし、暗きにすめるものを檻のうちより出さしめん。8われはエホバなり、是わが名なり。

【イザヤ43・1～2】

1ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此い給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有なり。2なんじ水中をすぐれども我ともにあらん。河のなかを過ぐれども水なんじの上にあふれじ。なんじ火中をゆくとも焚るることなく火焰もまた燃えつかじ。

【イザヤ49・1～7】

1もろもろの島よ我にきけ、遠きところのもろもろの民よ耳をかたむけよ。我うまれいづるよりエホバ我を召し、われ母の胎をいづるよりエホバわが名をかたりつけたまえり。6……我また汝をたてて異邦人の光となし、我がすくいを地のはてにまで到らしむ。7エホバ、イスラエルの贖主イスラエルの聖者は、人にあなどらるるもの民にいみきらわるるもの長たちに役せらるる者にむかいて如此いたもう。もろもろの王は見てたち、もろもろの君はみて拜すべし。これ信実あるエホバ、イスラエルの聖者なんじを選びたまえるが故なり。

【イザヤ50・5～10】

5主エホバわが耳をひらき給えり。われは逆うことをせず、退くことをせざりき。6われを撻つものにわが背をまかせわが鬚をぬくものにわが頬をまかせ、恥と唾とをさくるために面をおおうことをせざりき。7主エホバわれを助けたまわん。この故にわれ恥ることなかるべし。我わが面を石の如くして恥しめらるることなきを知る。8われを義とするもの近きにあり。たれか我とあらそわんや。われら相共にたつべし。わが仇はたれぞや。近づききたれ。9主エホバわれを助け給わん。誰かわれを罪せんや視よ、かれらはみな衣のごとくふるび蠢のためにくいつくされん。10汝等のうちエホバの僕をおそれその僕の声なきものは誰ぞや。暗をあゆみて光をえぎるともエホバの名をたのみ、おのれの神にたよれ。

【イザヤ53・1～6】

1われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれしや。2かれは主のまえに芽えのごとく、燥きたる土よりいづる樹株のご



とくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容なく、うつくしき貌はなく、われらがしたうべき艶色なし。³かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人に^{かなしみ}して病患をしれり。また面をおおいて避くることをせらるる者のごとく侮られたり。われらも彼をとうとまざりき。⁴まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。⁵彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰をうけてわれらに平安をあとう。そのうたれし痕によりてわれらは癒されたり。⁶われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

● 汝の言のごとく我に成れかし

²⁶その六月めに、御使ガブリエル、

「ガブリエル」という御使の名前は、「ガバーール」と「エール」という字がらきたので——「ガバーール」は「がんばり」と同じで、「神のがんばりや」という意味——「神の勇者」という天使です。

ナザレというガリラヤの町におる処女のもとに、神より遣さる。²⁷この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。

これはもう旧約の預言でもつて、「アブラハムの子、ダビデの子」とマタイ伝一章にあるように、「ダビデの子」ということは「メシヤ」の、ある意味において隠された言い方です。ユダヤ人はこの世に神政、神のまつりごとを行うところの君主が現れて、全世界に君臨するということなことを今でも夢見ている。預言者のメシヤ観にはそういう面もありますけれども、もうひとつ突き抜けた終末的な面との二面ありますが、ユダヤ人はまさにそれを現世的な面においてとらえている。ところが、キリストは、

「わが国はこの世のものにあらず」

と言われたので、このユダヤ人の期待が裏切られたようなわけです。しかし、それは裏切ったのではなくて、キリストはもうひとつ次元の高い王者である。

ヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。

「マリヤ」の家柄はわからない。

²⁸御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、

ダンテの恋人に「ベアトリーチェ」というのがありますが、あれが「恵まれたる者」という意味です。

主なんじと偕に在せり』

マリヤの方ではそれほどの自覚はないけれども、



「主がなんじと共にある、恵まれたる者よ」
 という。だから、恵みはまさにこちらの願い以上の事態として臨んでいる。
 「共にある」

ということも、こちらが独りかと思うと、実は「共にある」ということ。今日、私は「本願道」と題しましたが、もうここにも本願道が隠れているわけです。

²⁹ マリヤこの言ことばによりて、心いたく騒さわぎ、

何ごとかと思つたと、正直に書いてある。

斯かか 斯かる挨拶は如何いなる事ぞと

いったいどういうわけなんでしょうと、ちよつとわからない。

思い廻めぐらしたるに、³⁰ 御使みづかひいう『マリヤよ、懼おそるな、汝は神の御前みづかひに恵めぐみを得

たり。

もういつぺん書いてある。私はこの本（『無者キリスト』）にも書きましたけれども、「懼おそるな」というのは、その奥は

「こわがることはない。本当に恐れなき世界に入れてやるよ」

という恵みの言葉です。

³¹ 視みよ、なんじ孕みりて男子おとこを生まん、其その名をイエスと名づくべし。

「ヤーヴェーは救いである」という「エホシユアー」という字からくる。

「神は救いである」

というのがこの「イエス」という名前の意味、中味です。

³² 彼おおいは大おおいならん、至高いとたかきもの者ものの子こと称となえられん。

「大なる」といったつて、これは普通の大きさではない。もう絶大なものです。「絶」とか、「無」とか、私はこの頃こういう言葉が好きなんだ。

また主たる神、これに其その父ちちダビデの座くら位いをあたえ給たまえば、

「父」といったつて、もちろん祖先の意味です。

³³ ヤコブの家いへを永遠とこしえに治さめん。

「ヤコブの家」というのは即ち、「イスラエル」と同じことです。イスラエルの民族を永遠に治める。これは民族的な角度からまだものが言われているわけです。

その国は終ることなかるべし』

こういうような言葉を見ても、その「国」というのがやはり多少この地上的な気持がある。

「ダビデの座くら位いを与たまえられば」

という。まだこの御使の預言している内容も、完全に福音的に乗り切っているとはいえないので、やはりユダヤ的な角度が相当強い。そいつを現実に乗り切ったのがイエス自身なんです。

³⁴ マリヤ御使に言う『われ未だ人を知らぬに、



ヨセフとまだ関係していないのに、

如何にして此の事のあるべき』

と、正直にそう言った。

³⁵御使こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。

まあ大変な言葉です。キリストの生まれるのは聖霊による。至高者の神の力によるのだと。

此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。

クリスマスチャンも「神の子」といわれますけれども、イエスが「神の子」であることは全然別な次元のものです。

³⁶視よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。³⁷それ神の言には能わぬ所なし』³⁸マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』 ついに御使、はなれ去りぬ。

この最後の言葉、

「視よ、われは主の婢女である。神さまの婢女です。あなたの仰る通りに私に

成るように」

と。マリヤのこの言葉は新約聖書の中で一番大事な言葉の一つです。自分は主の婢女——男だったら、主の僕——僕・婢女は主人の意志にこれ従う、100%に。だから、

「その意志がどうぞ成ってください」

「我に成れかし」

という。キリストは、

「汝の御意を成させたまえ」

と言って、「我に」とは言わなかったが、言わなくても、イエスはもちろんそれは中に含まれています。

「御意の天に成ることく、地にも成らせたまえ」

だけれども、「地にも」といつて

「地の我を通して、地の我々を通して」

という、その自覚がなくて、

「地にも成らせたまえ」

なんていつて、よそごとみたいな三人称的な気持でいたら、そんな祈りはひとつも本当の祈りにならない。

だから実は、このマリヤの言葉は、キリストの全生涯を貫いている言葉を預言している。提身しないところには、何ごとも本当にならない、

「まあ、他人がやるからいい」

とか、そんな気持では。あなた方一人びとりがこの全集会を背負っていないで。でなけ



れば、集会というものは本当の集会にならない。

●「エホバの僕の歌」

イザヤ書の第二イザヤに「エホバの僕」(エベット・ヤーヴェー)という歌が五つばかりあるが、あれがみな本願道です。少し開こうかな。まず、イザヤ書42章。

「¹わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。²かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず。³また傷める蘆をおることなく、ほのくらしき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん。⁴かれは衰えずして喪胆せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言をまちのぞ

むべし。」(イザヤ42・1～4)

と。9節までずつとそうなんです。

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人」

とあって、「わが、わが、わが」と言っているのはもちろん神さまです。神さまがかく呼びかけ、かく顧み、かく力づけ、かく期待している。これが本願道なんです。詩篇はこちらからの祈りですけれども、預言書は向こうからの、神さまからの呼びかけが非常に多い。預言者はまさに本願道を伝えている。「信仰、信仰」と言うけれども、本当の宗教の世界は本願道なんです。

私は、だから、この「本願」という言葉が大好きです。本願とか霊願とかいう。「悲願霊願」なんていう文章を書いたこともありますけれども。私は「本願」が一番いい。

イザヤ書42章はまさにキリストですよ。

「⁵天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの産物とをひらき、そのうえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い給う。」(イザヤ42・5)

生命は霊ですよ。神霊のないものは生命はないんだ、本当は。いつも私が言っているように、「ひと」とは、霊が止まる「霊止」と書く。神霊の止まっているのを「人」(霊止)という。『大言海』(国語辞典)にちゃんと書いてあるから仕方がない。私はこういう字を見るだけでグツとくる。何といたしますかね、異言的な事態になる。すべて全存在的、全身的ですよ。

私は第三卷(『無の神学』1982年5月刊)に神学論説を書くつもりですけれども、神学というは無教会は嫌うし、原始福音の方々も嫌いなようです。嫌われても一向差し支えない。いわゆる神学は私も嫌いです。だから、私の「組織神学」ではない。劇的なんです、非常に。ドラマチックなんです。聖書は、申し上げている通り、ドラマです。

私は初めてこの御霊の信仰になってから、ドラマのよきというものがわかってきた。プラトンの哲学がその点で素晴らしいと思う。あれは対話、ダイアローグでもっていつている。



いわゆる論理的な運びではない。この聖書がまさにそうです。

皆さんの人生そのものがドラマではないですか。あなた方はドラマを展開しているんだ、自分で。そのドラマを展開して、少し下り坂になったり、少し行き詰まったりして、それで情気でしまったらダメですよ。パウロが何と言っているんですか。もつともつと盛んな霊にならなければダメです。ダメになればなるほど、行き詰まれば行き詰まるほど、逆に力が出てこなければ。私は自分で体験しているから言っているんですよ、頭で言っているのではない。どんなことがあっても行き詰まらないんです。

パウロさんがそうです。何といつてもキリストの弟子の第一番はこのパウロで、パウロの重厚性といつたらもう何ともいえない。「パウロ神学」なんていつたって、そんな頭でひねくり出したようなものは本当のものではない。私は第三巻の広告で「愛の神学」と書いたけれども、あれはちよつとそう書いただけのはなしで、本当は

「無の神学」

と書くつもりです。

この「無」というのは素晴らしい言葉です。

「天蓋の下に甘、甘の林」

と書くのが「無」という字だから、大空の下の四十の林は数えられない。無は即ち、無限無量を表す。単なる否定の無ではない。「否定神学」というやつもあるけれども、神秘家エックハルトあたりがそうですけれども。私が言っている「無」はいわゆる「否定神学」でもない。超神学の神学です。「無の神学」はまた「無神学」といつたっていい。とにかく、そういう非常に逆説的なものの言い方をせざるを得ない。何も神学なんていうものに私はこだわっているわけではない。今の神学がダメだから、とにかくひとつやってみようというだけのはなし。まあ、私はもの凄いファイトがありますから。人間はやさしいんだけれどもね。

「6云く、われエホバ公義をもてなんじを召したり。」

神さまの義でもって召したので、こつち側の義ではありませんと。

われなんじの手をとり汝をまもり、なんじを民の契約とし異邦人のひかりとなし、

みんなこれはキリストへの預言ですよ。

7而して瞽の目を開き俘囚を獄よりいだし、暗きにすめるものを檻のうち

より出さしめん。

盲人の目を開いたではないですか、キリストは。死人を甦らせたではないですか。あの「伝道」のところ（『無者キリスト』『キリストの実存十転』伝道）で私は書きました。あの盲人の「破れ」（人間の福音的実存七相「破れ」のところ）です。肉体的な破れとしては、目の見えな方は本当にお気の毒なことです。私は母で知って経験してきましたから。



8 われはエホバなり、^{これ}是わが名なり。」(イザヤ42・6～8)
 「ヤーヴェー」とは、

「我は在りて在らしむるものなり」

ということ。「在りて在らしむるもの」とは、私は自分で太陽を見て思いついた。こないだも、私はお天道さんを見ていて——いやとにかく静かですね、地球もちつとも動いているのがわからない——しかしあの太陽がこの地球を引っ張り回しているのはどういう力なんだろうかなと本当に思った。そして私はしばらく太陽を見ていて、何ともいえない気持ちになった。もの凄いエネルギーだなということ、なにかその時に非常に感じた。とにかく普段、何でもないことに凄い真理がある。それに驚嘆するような魂にならなければダメですよ、何でも当たり前のような顔してたら。

ゲートルという人がそういう人です。内村先生もそういう角度をもった魂でした。あとで私は棟方志功の言葉を少し引用しますが、彼もそういうやつだね。あの人は「やつ」と言った方が一番当たるかもしれない。そういうやつ。素晴らしい人です。とにかく、自分を本当にぶちまけている魂。もう整ったようなやつはダメ。

キリストが相手にしていたのはどういう人たちですか。みんな自分をぶちまけていたやつばかりではないですか。学者だのパリサイ人だの祭司だの、整った連中はキリストの向こう側だよな。みんなキリストをないがしろにしていた。

●旧約の本願道

イザヤ書43章をみましても、

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此^{かく}いい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ我なんじを贖^{あがな}えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有^{もの}なり。

と。素晴らしい言葉です。私は旧約の中で一番好きな言葉のひとつです。

「何も心配いらん。私はお前を贖った。私は汝の名を呼んでいる。汝はわがものである」

と。神さまにそのように完全に囲みとられ、支えられ、荷なわれている。言うことないじゃないですか。そのエネルギーで生きてください。この世の幸不幸なんて問題じゃない。どうぞ、あなた方の判断が「福音」というならば、福音は絶対界の現実ですから。この相對現実の奥で、本当にこの相對現実を逆に生かしていくところのもの、展開していくところのものです。

2 なんじ^{みずのなか}水中をすぐれども我ともにあらん。河のなかを過ぐれども水なんじの上にあふれじ。なんじ^{ひのなか}火中をゆくとも焚^やるることなく火焰^{ほのお}もまた燃えつかじ。」(イザヤ43・1～2)



これを手島さんのところでは火渡りをやっているわけだ。なんののかのとは人は言うだろう。私は何も言わん。とにかく、捨て身の事態は、毎日の生活が水渡り、火渡りで、神さまの、キリストのエネルギーを受けてくださいよ。どのような事態においても勝ちますから。あなた方は青年でしょ。私はもう70を越えたけれども。この福音は青年の宗教です。青年がそれを受けとらないでモタモタしていたら、どうするんですか。私は永遠の青年だ。

この『無者キリスト』を出したでしょ。無教会はほとんど注文してこない。注文してくるのは牧師さんたちです。私はキリスト新聞に二度、広告を出しましたけれども。まあそんなもんです。無教会というのは可哀相だね。なにかパリのサイ的に固まってしまっている。

「虚心坦懐に読んでみてください。そこに本ものがあつたら、本ものだと言ってください」

と言いたいんだ、私は。なぜ、齒にものをきせているのか。卑怯だよ。

手島さんはどうしてI君を追い出したのかね——私は手島さんの悪口を言いたくはないけれども、ちょっと手島先生はなかなか性格のあれがあつたね——彼は本当に聖霊の器です。また、彼と原始福音の人たちは交わらないらしいけれども、聖霊の世界でそういうことがあるんですか、聖霊の愛といいながら。手島さんが嫌つたつていいじゃないですか。

「I君！」

と言ってやればいいじゃないですか。

私はひとつもへだてががないです、どういう方でも。集会所の壁に昔の集會員の写真がたくさん掛けてある。時々、私はながめて祈っています。本当にそうなつてご覧なさい。これはもう天下無敵になるから。キリストは、

「神さまは雨を正しい者にも正しからざる者にも、陽を直き者にも直からざる

者にも、陽の光をあて雨を降らせているではないか。お前たちもそのように

あれ」

と言う。

「神の如くあれ」

という。恩寵はそのように絶対的なもの。それを受けるか受けないかは、そっち側のはなしだ。受けなければ自分で自らを裁いているだけののはなし。

イザヤ書43章もそういう本願道であるわけです。40章から55章までは第二イザヤですけど、本当に素晴らしい。特にこの第二イザヤ書は旧約の本願道の一番中心です。もう本願道に洩れるものはない。これは親鸞の歎異抄ではないけれども。バルトの中に書いてある。彼は歎異抄を読んで、

「こんな素晴らしい信仰があるかと驚いた。」

昔の文語訳は素晴らしいんだけど、詩のように行が改まっていない。だから、こな



いだ私は書いてやった。今度のキリスト新聞の「私と読書」という欄に出ますから。聖書のことを書いたところで、

「昔の文語訳は素晴らしいが、原語は詩の文体になっているのに、行を改めないのがまことに残念だから、どうか版を改めるときは、今の口語訳のように行を改めてほしい」

と。口語訳のいいところは、あの行が改まっているところですが、口語訳そのものはあまり感心しないが、けれども、いつやってくれるか知りません。それがいいとなったら、なぜ日本人はすぐそれを実行しないかね。ドイツ人がそう言っていましたよ、

「日本人はなかなかいいことに気がつくけれども、モタモタして実行しない」と。

イザヤ書49章の一番先にこういうことが書いてある。

「**「**もろもろの島よ我にきけ、遠きところのもろもろの民よ耳をかたむけよ。我うまれいづるよりエホバ我を召し、われ母の胎をいづるよりエホバわが名をかたりつけたまえり。**」**

預言者がこのような自覚を持っています。ここは「エホバの僕の歌」ではない。歌はむしろ5節からです。

6……**「**我また汝をたてて**「**異邦人の光となし、我がすくいを地のはてにまで到らしむ。**」**

と書いてある。

7エホバ、イスラエルの贖主**「**イスラエルの聖者は、人にあなどらるるもの民にいみきらわるるもの長たちに役せらるる者にむかいて如此**「**いいたもう。もろもろの王は見てたち、もろもろの君はみて拜すべし。これ**「**信実あるエホバ、イスラエルの聖者なんじを選びたまえるが故なり。**」**（イザヤ49・1～7）

と。これは全くキリストですね。イエスはイザヤ書を非常に愛読しておられたようです。そしてはつきりとこれを自覚された。預言者の預言以上の内容をイエスはそこでつかまえてしまった。50章の4節から9節、あるいは11節まで、ここがやはり「エホバの僕の歌」のところ。5節、

「**「**主エホバわが耳をひらき給えり。われは逆うことをせず、退くことをせざりき。われを撻つものにわが背をまかせわが鬚をぬくものにわが頬をまかせ、

これは十字架に行くキリストだね。

恥と唾とをさくるために面をおおうことをせざりき。主エホバわれを助けたまわん。この故にわれ恥ることなかるべし。我わが面を石の如くして恥しめらるることなきを知る。われを義とするもの近きにあり。たれか我とあ



らそわんや。われら相共にたつべし。わが仇はたれぞや。近づききたれ。

9 主エホバわれを助け給わん。誰かわれを罪せんや視よ、かれらはみな衣のごとくふるび蠹のためにくいつくされん。10 汝等のうちエホバの僕をおそれその僕の声をきくものは誰ぞや。暗をあゆみて光をえざるともエホバの名をたのみ、おのれの神にたよれ。」(イザヤ50・5～10)

それから非常に終末的などころはイザヤ書51章12節から16節。有名なのはイザヤ書52章13節から53章の終わりまで、これが一番の極致ですね。

讚美歌121番の「まぶねのなかに」は由木康さんの歌で、傑作です。由木さんはいろいろ讚美を作ったらしいけれども、あの一つの讚美歌を作っただけでも彼はこの世に生きた甲斐があつたと私は思う。素晴らしい讚美歌ですね、私はあれを聴くと涙がこみあげてくる。「荒城の月」とか、傑作を一つ作ればもうたくさんだよ。

皆さんもみなそれぞれ天賦の才能がおりなのだから、針仕事でも、編み物でも、何でもいい。天下一品の存在になってください。これは御霊の力によつて神さまは栄光を現したもうから。衆を頼みとするなかれ。歴史は個が動かしていく。人に見えようと見えなからうと、そんなことはどうでもいい。一人びとりの存在は、神さまが見ておられる。

●イザヤ書53章

イザヤ書53章は、もうご存じのとおり。

「1 われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれしや。2 かれは主のまえに芽えのごとく、^{かわ} 燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容なく、うつくしき貌はなく、われらがしたうべき艷色なし。

というけれども、外側はそう見えても、内側は本当にうるわしい。

美というものは——私はそのうちに美の論をしようと思つてはいるけれども(著作集第二巻『芸術のたましい』1976年12月刊)——内側のうるわしさというものを忘れて、外側のうるわしさばかり。それは内外相即することももちろんあります。キリストなんていうのは本当に内側からのものです。それがまた何ともいえない、どんな形をしていても、そこには本当の天的な美があるはずです。聖霊に満ちているひとは、目がちがつてくるものなことに女の方は本当のうるわしさが出てくる。

3 かれは侮られて人にしてられ、^{かなしみ} 悲哀の人にして

あるいは、苦しみの人にして、

^{なやみ} 病患をしれり。

悩みに親しんでいると言つてもいいくらいです。

また面をおおいて避くることをせらるる者のごとく侮られたり。われらも彼



をとうとうまざりき。

この「悲哀の人」という言葉は、無教会ではよく先生方は好きだった。けれども、この悲哀というのはセンチメンタリズムではない。本当に人の悲しみを、苦しみを荷なっている人なんです、この「悲哀の人」というのは。彼は、自分自身はちつとも悲しくない。もの凄いいかに満ちていますが、本当に人の苦しみを受けて、その姿が自ずからそれを荷なっている。

「人の苦しみを苦しみとする」

というのは、観念的にしてない。自分が受けとってしまっているわけです。

4まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰をうけてわれらに平安をあとう。そのうたれし痕によりてわれらは癒されたり。

北森さんが『神の痛みの中の神学』という本を書きました。これは世界的な名著だから、ドイツ語にも英語にも、またなにか他の外国語にも訳されるというはなしだ。私は独訳を彼からももらいました。あれは名著は名著です。

けれども、神さまの痛みというのは、もちろん義と愛との板挟みになったから、痛みです。直接の愛ができない。人間は罪びとだから。そこで、神はそこに痛みを覚えるという。心理的にはそういうのがあります。神さまの痛みを土台とした愛ということを彼はもちろん言ってますけれども、それは一応それでいい。神学的構造としてはそれは正しい。

けれども、この痛みは、痛みを持ちながら、もはや人間の側にはその痛みは隠されている。神さまはもうそれからはつきりと、もつと積極的な、人間の我々の罪をもう忘れてしまったような角度からの愛をもって臨んでくださる。その愛の極致が、このキリストの碎けです。もちろん、碎けだけではない。碎けから、碎けを突破して、聖霊を私たちに注ぎこんで、もの凄いいびの世界に、喜びの世界に入れる。だから、キリストが

「よろこびの音信」

と言われたのはそれです。

このクリスマスも、「おめでとう」とかなんとか言う。歓びのおとずれで、本当に大歓喜。

「大歓喜を福音する」

とこのルカ伝にも書いてあるでしょ。「大歓喜の福音」というのは、もちろん神さまの痛みを越えて、もう神さまは痛みをも既に忘れてしまつて、そして新しき直接愛でもって向かつてくるような、そういうわけです。いつまでも神さまが痛まれている、こっちはやりきれないよな。神さまが痛んでいる、私の罪のことを痛んでいるなんて。そうだとしたら、十字架の贖いはどうしてくださるんですか。

まあとつくりそのうちに私は書くつもりです。北森君にも私はこの本（『無者キリスト』）



を送ったんだよ、そのうちに何とか言ってくるでしょう。

●キリストの本願道が一貫

6 われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエ

ホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。」(イザヤ 53・1

～6)

この降誕節ですけれども、私たちはなぜこのキリストをかくもありがたく祝うかという
と、ただ普通の、

「クリスマス、おめでとうございます」
ではない。

「言い逆」の徴

となって、砕けを通して、そして私たちに突入してくださるところのキリストの恵みは一貫しているんだ、本願道が。キリストの本願道が一貫している。この本に「キリストの実存十転」と書きました。いわばこの十転は全部これ本願道です。最後に「本願道」という詩を書きましたけれども。

そのようにして、私たちをどこまでも救いあげて、そして神の栄光を我々を通して現そうというのが、これが本願道です。救われて

「めでたし、めでたし」

なんてものではない。救われたら、必ず神の栄光を現さざるを得ない。現していなければ救われていないと言ってもいい。

「私はもう救われました。のほほん」

なんて、どっこいそれは天国へ行こうと思ったら、

「ちよつと待て、お前はちつとも神の栄光を現していないではないか」

と言われるよ。本当に救われていれば、即、栄光が現れるという事態になっていく。恵みにあぐらをかいてしまつてはダメですよ。深い平安と力強い動の面が——いつも言っている静動一如の事態が——自由自在に展開していく。

「僕」からずつと今、イザヤ書をたどってきたわけですが、エホバの僕、エホバの婢女はしためということ。

「汝の御意をどうぞ私を通して実現してください。私の願いではありません」

と。あなた方は、願いを持った方がいいよ。いいけれども、その

「願いが聞かれた。めでたしめでたし」

なんていうのでは、本当の信仰ではない。

「願いが聞かれる、聞かれない」

なんていう結果は問題にしない。その願いの奥の世界の、一番本当の願いは、キリストを



受けとって、

「どうぞ、私を通してあなたの御意が実現してください」

と、これが願いの願いです。キリストがそのようにして突っ走ったではないですか、イエスが。そうしたらば、どんなに人を救っていったんですか。どんなに素晴らしい言葉が溢れてきたんですか。そうでしょ。あなた方のなさることは、どしどし神の栄光が現れる。

私は、ヒルティの幸福論を書いてますけれども、ヒルティさんもただ幸福を問題にしてるような幸福ではない。誤解されては困るけれども。いわゆる幸福主義に反対したのはマルチン・ルターです。

「カトリック的な幸福主義ではないぞ」

と言う。やはりルターの角度はもちろん正しい。私の藤井武先生がそうでありました。

何か本当に不思議ですよ、行き詰まらなくなるから。行き詰まったときこそ実は、新しい素晴らしい道が開ける前提だと思ってくださいよ、皆さん。

まあ、いろんなことで今日来ない人がいるよ、何だかっていうんだ、この福音を聞いていて。なぜ、過去を打ち捨てて乗り越えて来ないんですか。あるがままの姿で来たらいいじゃないですか。キリストは、あるがままの人をそのまま、体当たりする者を全部受けとっていただくんですよ。

「お前はこうだったから、今こうだから」

なんて、そんなくだらないことを仰らないですよ、キリストは。私は、

「一体何を聞いていたのか」

と思っただけ、嫌になってしまおうよ。毎回毎回、真剣勝負でやっているんだから。

マリヤが、

「汝の聖言のごとく我に成れかし」

と言った。この「我に」を忘れてはいかん。「汝の聖言のごとく成れかし」ではない。

「どうぞ、この私に成ってください」

ということ。プロテスタントは、「罪びと、罪びと」といって、自分のことをただ妙にしよんぼりしてしまふ。そんなことではないですよ。罪びとを神さまは使うんだ。相対的判断は神さまはなさらない。

●『板極道』

この棟方志功の『板極道』(1976/1/10初版発行、中公文庫)という本を読んでいると、これは楽しい本だ。後の方に彼はこういうことを言っている。「わたくしの極道」というところに、

「これからのわたくしの仕事というものは、他愛のないものというのでしょうか、そういうものになりたいのです。力とか、慾とか、そういうものはいらぬ世界、本当



に他愛ない世界から生まれてくる仕事、願うことではなく、願われる仕事、そんな欲でない慾をもちたいものです。

これはやはり、本願の角度になっている。

このごろわたくしは、宗教の在り方というもの、——わたくしは禅宗ですから、禅の在り方というのからはいりまして、それからこんど、戦さのうち、真宗の在り方——いわゆる禅は自力で真宗は他力なのですが、この他力の世界というものを非常にいただきました。いままでの自分もっている、一ツの自力の世界、自分というものは、自分の仕事で仕事をするというふうなことから、いや、自分というものは小さいことだ、自分というものは、なんという無力のものか、なんでもないほどの小さいものだという在り方、自分から物が生まれたほど小さいものはない、そういうふうなことを、この真宗の教律から教わったような気がします。

浄土真宗をつかまえてしまった。

それから振り返ってきて、五十から六十になった間に、一瞬のように短いその時間に、わたくしが念ずることは、大念仏ということなのです。この融通念仏というのですか、空也が報じたその在り方です。融通されてこそ、その仕事が自然にはいつていくものだ、生まれていくものだという、一ツの教えだと思えます。自分で、今日はいいい仕事をしようとか、今日はいいい仕事になろうとかいう、個の念願ということよりも、衆の念願、普遍的な意味の世界から念願かけて、美というものの在り方に近づいていく世界、いわゆる念願を融通されている世界、他人が個のために美を衆にかけている、他力によって融和されている願望というものがこそ本当じゃないか、というふうな思いが、この短い十年で、からだにはいつてきたような気がするのです。「『板極道』「わたくしの極道」より）

おもしろい言い方をするね、この人は。

「わたくしは、自分で板画をやっていますから、板画のことになると、鬼にもなり、蛇にもなり、仏にもなり、神にもなってもらいたいです。わたしの板画にそういうものを表現してもらいたいです。自分でするのではなく、してもらいたいです。

「してもらいたい」というのは他人ではないですよ、何ものかです。

ですから、わたくしがした仕事ではなく、板画がした仕事になってもらいたいです。」

『板極道』「戦後の作品をめぐって」より）

相手が材料でも対象でもなくて、この画そのものが自分を動かしているというんです。まああの志功が画を描いている姿を見ると、本当にキチガイみたいだね、ものに憑かれています。彫刻しているけれども、何かその現実が志功を動かしているような格好。これが今のその言葉です。本当の世界というのはいみんな、私はそういう意味における共通なものを持っていると思います。碧巖録を読んで、



「先生（河井寛次郎）、『碧巖録』は、どこもかしこも同じです。則題はちがいますが、一則目も百則目も無ではありませんでしょっか。」

「結局、碧巖録の究極は無ということを書いている」といふことを書いている。そして、

「先生のお話は、リッぽべ、有益であるが、結局は「無」を語っておられるのではないか。答えはないのです。心もなく、身も忘れる。……先生の毎日語っていられるものは、無限の無である。そして無限の世界なのです。」

と、私と似たようなことを言っているよ。

「わしの話も、今日で終りということにしよう。棟方に、板画がつくるのではなく、生まれて来るよつになるよ。しっかりしろッ」（『板極道』『苦闘の日々』より）
と。板画の方から、何か自分を生かしていくようなこと。非常に生き生きとした本です。

●「万法は無より生じ、煩惱は我より生ず」

それから、一遍上人の句をちよつと引用してみますと、

「万法は無より生じ、煩惱は我より生ず」

と彼は言った。これは非常に名言ですね。

「万法は無より生ず」

という。

「万のダルマは無より生じ、煩惱は我より生ず」

と。東西の宗教の極致はみなそこをひとつの契機として展開する。

煩惱は我より生ずる。この我。これがもう政治でも経済でも何でもかんでもみんなこれが災いしているわけだ。すべての文明文化の究極の問題は心の問題に帰する。私は森戸辰雄前文部大臣と今度の文部大臣にこの本を送った。この本は私自身ではない。あるひとつの使命を帯びていますから、私は遠慮なくそういうのを送るんです。そのうちに何とか言ってくると思いますけれども。

煩惱は我より生ずる、この我を取ってくださったのがこのキリストなんです。十字架なんです。十字架をいい加減にしたらダメ。無教会は

「十字架、十字架」

と言っているが、ではなぜ、そのキリストの、キリストという我を受けとらないか。ペテロが、

「我を視よ」

と言ったその「我」をなぜ受けとらないか。それは聖霊の世界です。

大体、教育家に権威がないのは結局、それを持たないからです。もう



「笛吹けども躍らず」
で嫌になってしまおうよな。まあ少し気長にやりましょう、私は短気だから。

●読者からの手紙

ここに一つの手紙があるから皆さんに読んでできませしょう。

「聖名を心から讚美申し上げます。頂戴致しました『無者キリスト』を拝読し終えました。こもる聖霊の呻き、先生の全身全霊を注がれ祈り込まれた一言一句は、正に福音の粹聖書の精髓です。どこを繕いても、どこの一言一句からも、福音の真理の血潮が迸り出で、靈感に圧倒されます。そして、全編に漲る偉大な韻律の響きに内なる琴線が激しく接触して旋律を奏で、天に向かつては讃歌となり、世に向かつては『黙せ、此の人に聴け』と叫びます。

構文も御霊の御支配と充満の故に従来の型を突き破り、天衣無縫、道詞と福詞と命詞が無尽に駆使せられ、霊的感動詞で組み合い構成され、一大叙情詩としての感があり、誠に驚嘆し平伏すのみです。

無者キリストはキリスト教の世界に第三の革命をもたらし、福音を従来の教えから本来の道に引き戻し、正に御前に先立つて行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の霊をもたせるであります。キリスト教界が無心虚心にこの『無者キリスト』を身読み、教界だけでなく、特にこの国の指導者層が伏してこの一巻の呻きに聴き悔い改めて、生ける永遠の真理を受けとり神に立ち返り、光は東方よりの言葉の通り、今こそ真に日本的靈性に覚醒せんことを祈らせられます。

この教界この国でどれだけの者が『無者キリスト』を真に読みきれるかわかりませんが、ただ五十人、いな十人の人が読み切ったならば、大変なことが起きると思います。そして、百年、五百年を経て、東方の一隅から現れた一巻が聖典の列に列せられることでありましょう。年末年始の休暇を利用して更に再読したいと存じます。降誕節を迎えます。主の御霊が先生の上によいや増し満ち、この終末世相にあつて尊き器としてまた終末的預言者として、祝福に祝福を増し加えられますように祈りあげます。「というわけで、ある方からこのお手紙をいただきました。それから、ある哲学者から、「ここに初めて日本の神学が現れてきました。どうぞ大いに更にご精進ください」

というような便りがありました。これはカント哲学をやっている人です。まあ段々、波紋が起きるかと思っておりますが、私はいよいよ平伏してまいります。

そういうことで、あなた方一人ひとり、もうこの福音を受けたら、表現できないような来年を展開していかれると思えますが、本当に読んでくださいよ。

「ああ、先生の本が出た。立派な本だな」

なんて、外ばかり見てたつて。飾っておかれるような本ではない。学校の先生がだよ、



何十人もいて、私に本当に共感してくる人が一人もいません、みんな買っているんだけど。結局、まあそれはしょうがないね、初めはわからないかもしれないが、本当に虚心坦懐で読めばちつとも難しくはない。どこかに響くわけなんです。そのどこかで響けば、あとがずつと反響してくる。どこかで響くと、その響きが反響して、先が読めてくる。そういうもんなんです。聖書だって、そういうものです。聖書のある一か所が読めてくると、私だって、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

と、これが私に化体したら、キリストの言葉があとは楽に読めてしまったのだから。そういうものなんだ。

●どうぞこの私を通して

そういうわけで、このただ一句、

「我は主の婢女である。どうぞこの私を通してあなたの本願が成ってください」

と。いいですか、

「本願が成ってください」

ということとは、ただ言葉ではないですよ。これは言葉以上の世界なんです。マリヤのこの言葉をそのまま身をもつて、これを本当に自分の全身的な祈りにしなければダメです。

「その本願が成ることが私の最大の喜びです」

と、こうこなくてははいかん。本当の世界はみな大歓喜の世界です。

近頃はベートーベンの第九シンフォニーを、昨日もテレビでやっていた。解説者がくだらないことを言っていたよ。ベートーベンが怒るよ、あんなバカらしいことを言っていると。

ベートーベンやシラーはみんな本当に命懸けで詩をつくり作曲している。それをまた年中行事みたいにしてしまっている。第九シンフォニーならば、聴くよりも、自分が本当に第九シンフォニーの第四楽章になって、キリストの福音を受けとらなければ、あの歓喜は出てこない。

ベートーベンは最後に十字架の第十シンフォニーを書きたかったらしいけれども。その気魄をもって本当に聴いているか、また本当に歌っているか、本当に演奏しているか。

これは何といってもドイツでやると違うです、ドイツ人はその気魄を知っているから。だから、いくら日本のやつがうまくなったって、それは技術がうまくたって、魂が本当のところに行つてなければ。なにごとく最後は、魂の世界ですから。芸術ではない。道です。

こないだ私は学校の校外学習で生徒を連れて文楽を観に行った。文楽の演技をする人は、自分が人形と一緒に悲しんだり笑ったり苦しんだりする、その気魄でもつてやる。そうしたら、聴衆観衆はその気になって、ある時は泣く人も出ていい、笑う人も出ていい。

「それを黙って見たり聴いたりしていられたら、こっちはやりきれん」



とその人は言いました。だから、見る者、聴く者と演ずる者とが一体とならなければ、この道は本当のものではない。

「庶民はむしろ分かってくれるが、インテリが一番いかん。インテリはすぐ批判的な目で聴いたり観たりしている。もう冷たくなつて、こっちは苦しくなる」

と。本当にそうだと思います。インテリというやつが一番いかん。だから、

「偽善なるかな、学者、パリサイ人よ」

と、キリストが言われたのは、

「偽善なるインテリ人よ」

ということなんだ。我々はどこまでも、根は本当に神に創造されたところの自然人であること、野人であること。何も野蛮な風をしるというわけではないけれども。要するに、自分自身が本当につくろいのないところの事態にいかなければ。これは福音がする。

まあその点ではどうも、あの無教会はインテリ宗教になつてしまつたから困るよ。ギリシア語やヘブライ語のよくできる人の方がよく聖書が分かると思つたりしている。そこまでは言わないんだけど、暗にそうしている。日本語でたくさんだよ。ところが、どうもそういう伝統があるね。

「ギリシア語やヘブライ語で解説しているのがより良さそうだ」

と。いいよ、そんなものしなくたつて。その奥です。ギリシア語やヘブライ語が神さまの言ではない。神さまの言はその奥にある。神の根源語、というものは、ただギリシア語やヘブライ語を通しただけのはなし。その神の根源語を——ギリシア語やヘブライ語を知らなくたつて——つかめるんだよ、この御霊の世界で。パウロ以上に、パウロさんがモタモタしているなら、その奥を表現できるんです。キリストが、

「昨日も今日も次の日も、私は進み行く」

「お前たちと前進して神の国をきたらせようとしている」

と。創造的な人にみななつてくださいよ、生活そのものが創造的に。いろんな体験は全部、本当のプラスにしてしまふ。

学校で時々、間違つたことをする生徒がいるよ。私はまずちゃんと叱ります。けれども、

「お前はこの間違いをひとつの跳躍台にして前進しろ。私たちはよくよしないから。その代わり他の生徒よりもっと立派になるくらいな気魄でもつて行け」

と、励ましてやる。必ず親と一緒に呼びますから、親が泣きますよ。そのようにして、本当の教育というものは、魂を活かしていかなかったらしようがないものね。

一遍上人というのは、またある意味において、親鸞のもうひとつ先に行つたくらいのも、彼は弥陀の本願と一如になつた歩き方をしていた。彼は口からもちろん陀羅尼、預言、異言的なものがほとぼしつていたらしい。

そういうことで、いつも根源の現実に本当に、



「どうぞ、この私を」

と言って、皆さん一人びとりがキリストの現象体となる。

「我はまことの葡萄の樹」

とキリストが言われた。椏もみの木を見て、

「私は本当のクリスマスツリーである」

と言うのと同じだ。

「この木よりこっちの方が本ものだよ」

とキリストは言われた。キリストは神の本当に現象体ですから。イエスに來ないで、どこに神さまを見ようというんだ。

今の教育の根底に、

「万人は宗教人である」

ということに気がついて、全国の校長さんたちがまず山に籠もって、断食でもして祈って冥想してかかるくらいのことじゃダメだよ、この日本は。どんなに制度をよくしようが何しようがダメ。先生方が——日教組なんてやって——小さい魂をみんな損ねてしまふ。

あなた方は、家庭教育が大事です。学校にあまり期待できないから。お父さん、お母さんが家庭でもって本当の教育をしなくては。子どもに遠慮なんかしているようではダメですよ。小さい時からピシャッとやらないと。もちろん、愛をもってするんですけども。そこがドイツ人は大体においていい。ドイツのお母さんたちは、子どもが間違ったことをしたら、他人の子どもでもはつきり言うから。

大体、シルバシートなんてものを作るようなことではダメだ。ところが、このシルバシートに、どうですか、お年寄りが坐って若いのが立っていますか。全然その反対な場合がほとんどではないか。もうこんな日本は何だというんだ。バスに乗って、先生が来たら生徒は立ちますか。私は学校の生徒にはつきり言っている。

どうぞ、皆さんは——なにも先生が教育者ではない——本当の教育者はあなた方ですよ。むしろ家庭における教育が大事です。だから、私はPTAでお母さんたちにそのことをはつきり言う。今は、真理をはつきり言う人があまりいないんだ。またそれをつかんでいないものだからしようがない。

この福音に入ったら、皆さんは本当に——この福音はなにも御利益宗教ではないですから——どうぞ、ことあるごとに自在に福音の根底から身を処してください。そこに

「汝（神）の御意」

がその人を通して成っていく。神の栄光が現れ、神の真理が現れ、神の真善美が現れていく。そういうことを是非とも、このクリスマスは正にこのマリヤの一言を刻みこんでいただきたい。終わります。



● 祈り

行き詰まった時に、

「時は満ちた」

と、あなたはここに偉大なる隠れたる徴、イエス・キリストを世に遣わし給いました。馬槽の中に生まれたどん底のイエス・キリスト。ここに救いの根源がありました。彼は地上において三十年。付き従ってきた弟子たちも遂に彼を棄て、主さま、あなたはただ一人、いかなる人もこれを察知することのできない深刻な十字架を負われました。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」

と、驚くべき叫びが発せられました。また、あなたの不思議な異言的な大きな叫びによって至聖所の幕が二つに切つて落とされ、旧約の宗教はここに圧倒せられ廃棄せられ、そして、あなたは本当にこの十字架の贖いを全うし、

「やがて、私はお前たちの中にやつてくる」

と、この聖霊を降臨せしめ、私たちに本当の救いをくださいました。驚くべきこのあなたの降誕は、十字架・復活・聖霊にまで連なっております。このような我らの主イエス・キリスト、とうてい言葉では表せません。主さま、

「我なんじのうち、汝わがうちに」

との事態をパウロはその手紙でもってさんざん告白していますが、そのような使徒的な内住の世界をいよいよいただき、汝の御意を身をもって体することの何よりも自然であるような事態に、いよいよ、神さま、私たちを鍛え上げ導いてくださるよう願います。そこに本当の力があり、そこに本当の喜びがあり、そこに本当の恵みがあり、そこに本当の光があります。神さま、そのようにして、この一人びとりを通してあなたのご栄光が、あなたの救いが、あなたの助けが現れますように願います。

Hさんは電車の中でパンフレットを懐にし、隣人に語りかけて、この福音をと言って歩いている人です。神さま、どうぞ、そのようなことで、私たちがまたいかなる時にも、この福音を人に伝えることが、存在即使命であることをいよいよ自覚し、進ましめ給わんことを願います。

そこには必ずあなたが力をくださる。そこには必ずあなたが愛をくださる。流れ流れて尽きざるものを、泉の如くとサマリヤの女に向かつてあなたは仰いました。本当にまた、燃えて尽きざるところの火であり、流れて尽きざるところの泉であり、本当にこの聖霊の事態は何と不思議なことでしょう。この事態にこないで、何の福音かと思えます。

どうぞ、今のキリスト教界がそのようなこの事態を、原始の福音の使徒的信仰からズレているとするならば、カトリックにあらすプロテスタントにあらす無教会にあらす、何々にあらす、ただすべてがこの原始のあなたに直結するところの事態に、どの集会であろうと、カトリックであろうとプロテスタントであろうと、立ち返ることができますように切に願



い奉ります。そのためにすることが本当に第二の宗教改革であることは、一人びとりがなすべきことです。

神さま、1976年に向かっていますが、日本には望みがありません。ただ上からだけ希望がきます。この行き詰まった混沌たる日本において、ただこの福音だけが本当の希望を与えるもの、力を与えるもの。そのために私たちは本当に全生涯をこれから燃やし尽くして行きたく存じております。あなたが為し給うから、あなたが燃え給うから、感謝です。

神さま、本当にあなたが…(異言)…、神さま、どうぞ、この兄弟姉妹たちがこの福音を身に受けずして何をか得んと、全くその他の何のものでもありません。感謝、感謝。聖名を讃え奉ります。イエス・キリストは今、現に生きてありたもう。今、私たちの中に来たりたもう。今、私たちと共に歩きたもう。神さま、本当に感謝です。

今、この兄弟姉妹たちを通して、過去の一切を乗り越え、今日来れなかった兄弟姉妹たちをそれぞれの所であなたの御光をもって打ってやっってください。あなたの御声をもって彼らの耳を開いてやっってください。一切、本当に問題はありません。もし人間的なことにこだわっているならば、それは本当に何ともしようがない事態ですが、あなたに逆らっていたところのパウロを、

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか！」

とひっくり返し給うたように、一人びとりを本当にあなたに立ち返らせるために、千変万化の姿をもってあなたは臨んでくださるように切に願ひ奉ります。私たちの愛は決してなまやさしい愛ではありません。神さま、本当に私たちが顧みるというならば、その人の本当に救われんことをだけ顧みまた祈ってまいります。

私たちは何にもありません。神さま、イエス・キリストだけ…(異言)…。どうぞ、兄弟姉妹たちと共に、また今日一日をどうぞ、あなたを中心として、御名を讃えつつ進ましめてください。

また特に、来たくて来れない兄弟姉妹たちで、病に伏している者を、どうぞ今この瞬間にも、神さま、癒してやってください。あなたに祈るところに…(異言)…、力は必ずきます。○君の奥さんも風邪を引いてしまったようですが、力を与えてやってください。一人びとりの名前はあげませんが、どうぞ主さま、私たちの祈りはただあなたが本当に本願の願いをもってあなたがなし給うがゆえに、全的に受けとるところには必ず即刻成ることを、イエス・キリストが成し給うことを、神さま、本当に感謝いたします。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に、御名により捧げ奉る。アーメン。

